

「この国は農家に優しくない。」

私が幼い頃、米農家の祖父は、そうつぶやきました。私の祖父は明るくて、いつも調子のいいことばかり言っているような人です。しかし、この時ばかりは、普段の姿から想像もつかないほど真剣な表情でした。

最近、米の価格高騰や備蓄米の放出などをきっかけに、私の記憶の中で、祖父のこの言葉がよみがえりました。私は、改めて祖父に話を聞いてみることにしました。

祖父の米農家としての人生が始まったのは、祖父の父が亡くなってからです。当時は長男が家業を継ぐのが当たり前の時代だったため、長男である祖父は、長距離トラックの運転手と米農家を兼業することになりました。あれから三十四年。祖父は今年で七十三歳になりました。

米作りはかなりの重労働です。辛い思いをすることも多かったでしょう。それでも続けてきた理由について、祖父は「家と地元を守らなければならない。家族には自分の作った美味しくて安全な米を食べてほしい。」と語りました。迷いのない、真っ直ぐな声でした。

一方で、祖父は、農業に対する不安も口にしました。近年の異常気象や虫の害で、米がよく育たず、収入が安定しないことなどです。そして、そのような現状が、米農家の後継者不足に拍車をかけています。私は、祖父が「最近、三十代の若いやつが一人入ってきたんだ。」と嬉しそうに話すのを聞いて、心が痛みました。たった一人の若者に、ここまで歓喜している。それほど、農家の高齢化は深刻だということです。いくら機械化が進んでも、後継者がいなければ、農業を存続することはできません。実際に、農林水産省のデータによると、二〇二三年の農家の数は、十八年前と比べて半減しています。さらに、現在の農家の平均年齢は六十九歳。今後も後継者が減り続ければ、たくさんさんの農家が、高齢を理由に農業から手を引くことになります。ただでさえ食料自給率の低い日本にとって、これは大きな問題です。

農家の後継者不足を打開するためには、もっと多くの若者を農業に参入させることが不可欠になります。農業の魅力を発信したり、新しく農業を始める若者を支援したりする政策を行っているところもありますが、大切なのは「後継者」という視点です。私は、農業界にも、もっとM&Aの考え方を浸透させるべきだと考えます。具体的には、県や市が、農業に興味がある若者と、後継者を必要とする農家をマッチングするシステムを構築し、それを運用して、若者が農家の仕事を承継できるようにするのです。さらに、農家が若者に対して、農業の技術やノウハウを指導する期間も設ければ、ゼロから農業をスタートする場合に比べ、若者はかなり安心できるでしょう。引退する農家としても、農業をただ辞めるのではなく、大切にしてきた土地や農機具、取引してきた顧客、長年培ってきた技術やノウハウを「後世に託す」という気持ちになれ

るのではないだろうか。

しかし、このようなシステムも、若者が農家になることを選択したいと思うわなければ実現しません。「この国は農家に優しくない。」祖父のこの言葉は、農家がいつの時代も国の政策に振り回されてきたことを意味しています。安さでは敵わない、海外から輸入された農作物の存在。減反政策。農家に支払われる、最低限生きられる程度の報酬。それに加え、近年の問題として、異常気象による不作や、燃料を代表とする諸費用の高騰もあります。十分な収入と、その安定が保証されなければ、新しく農業を始める若者は増えません。日本の食料自給率を支える農家を、国はもっと大切にし、農家の収入が安定する政策を実行するべきです。

私が祖父との話をきっかけに考え始めた農業の未来。今の私にできることは、まだありません。しかし、これから、農家である祖父の声を、私の考えを、届けられる場所に私は立ちたい。

「この国は農家に優しくない。」

十年後、この言葉を発する農家が一人でも少なくなることを願って。